# 砂漠の国の月の姫

優姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
砂漠の国の月の姫

【Ｎコード】
Ｎ５７８１Ｔ

【作者名】
優姫

【あらすじ】
歌いのが大好きなマリアベルは、音楽に盛んな国の王子が気になって仕方なくなる。そんな時、夢に月の女神と名乗る女性が現れて〜…。

# 月の姫

「私の～心の中には～」
ある海を越えた大きな国に金色に輝く屋根、壁にはいくつものダイヤモンドの埋め込まれた大理石の床などがある、とても大きな城があった。
その城の一角。ピアノの置かれた部屋でマリアベルは歌を歌っていた。
「またその歌を歌っているの？」
突然、背後から声をかけられ歌を歌っていたマリアベルは歌うのをやめ声のした方に振り返った。
「カナリア姉様 」
マリアベルの背後、扉のところに立ちこちらを見ていたのは１５歳のマリアベルより５つ上の第一王女のカナリア・ロイド・ミルヴィンだった。
「マリアベルはその曲が好きね。名前は確か… 」
「『女神の悲愛』」
カナリアがマリアベルの方に向かいながら顎に手を当て曲の名前を思い出そうとしていたらまたもやカナリアの背後で声がした。
カナリアが振り返ると、そこには第二王女のルルベル・ロイド・ミルヴィンが立っていた。

この国、「サルーナ国」は砂漠の真ん中にある砂漠にある国で一番大きな国だった。
彼女達はこの国の「ソルン・ロイド・ミルヴィン王」の三人の愛娘である。
三人は姉妹と言っても似ていなかった。第三王女のマリアベルだけが黄色（おうしょく）の肌に髪も瞳も月の色である青銀色をしていた。
その理由は、王の正妃であったカナリアとルルベルの母がルルベル

を産んですぐ亡くなってしまい、寂しくなった王は旅で城に訪れた歌劇団の歌姫、マリアベルの母と出会い恋をしてマリアベルが産まれたからだ。
砂漠に住む者は皆、褐色の肌に瞳や髪の色は皆バラバラだが、王の第二妃となった王妃はまだ赤子の頃、歌劇団長に拾われたということでか、マリアベルと同じ黄色の肌に髪も瞳の色も月の色をしていた。
それを理由にかマリアベルは国の民から『月の姫』と呼ばれていた。いくら砂漠の国といえど、誰も第二妃やマリアベルのような髪と瞳の色をしているものはいなかった。
第一王女であるカナリアの髪は黄金色で瞳は王と同じ海の色だ。第二王女であるルルベルの髪は薄緑で瞳の色は亡き王妃と同じ濃い緑色だった。
ルルベルはゆっくりとマリアベルの傍に寄る。それに続くようにしてカナリアもマリアベルのところまでやってきた。
「さすがルルね。私、忘れちゃってたわ 」
『ルル』というのはルルベルの呼び名である。
「お姉様方どうかなさいましたか？」
傍に寄ってきたカナリアとルルベルにマリアベルはピアノを片付けながらに問いた。
「あぁ。そうだったわ。マリアベル、ルルベル。お父様のお呼びよ。謁見の間に行きましょう。」
「「お父様が？」」
カナリアの言葉にマリアベルとルルベルが二人して声を重ねて聞き返してしまった。
「え？」
声の重なったルルベルの方にマリアベルが向くと、そんなマリアベルの視線に気付いたのかルルベルは小さく答えた。
「私は。マリアベルの歌が聞こえたから…。傍で聞こうと思って…
」

「そうだったんですか…。それではまた、明日お聞きになってくださいね？」
とマリアベルは頬を薄く染めルルベルにそう伝えると、ルルベルは今度は何も言わずうなづいて見せた。
と、突然！カナリアがマリアベルに抱きついてきた。
「ダメよ！ルルベル、抜け駆けなんて許さないわ！マリア！私も聞きに行くわね！？」
「は、はい。お待ちしてます。」
マリアベルはそうカナリアの腕の中でうなづいた。ルルベルわというと…表面上はいつもどおりだが…心の中では舌打ちをしていたのだった…。
そうして三人は一緒に王の待つ謁見の間まで移動した。

謁見の間に入るための扉を近衛騎士が開くと、カナリア・ルルベル・マリアベルは一緒に謁見の間へと足を進めた。
扉から中に入りしばらく歩いて行くと、壇上が見えてきた。一番上の段には王と妃にしか座ることを許されない椅子が二つ置かれていた。そこには既に王、ミルヴィンが座っていた。
ミルヴィンはどこかの国からきた使いの者と話をしていたようだが、三人が来た事に気づくと話をやめてしまった。すると、王と話していた者が姫が後ろにいることに気付き、その場で深く頭を下げ礼をすると、そのまま謁見の間を後にしてしまった。
「お父様参りました 」
カナリア・ルルベル・マリアベルはそう言いながら王の前、段の下で片膝を床に付き、俯きそう言った。
「カナリア、ルルベル、マリアベル。お前たちはサンメリア国を知っているか？」
『サンメリア国』とは隣国の国だ。砂漠のこの国とは違い、あそこは音楽にありふれた素晴らしい国だと聞き及んでいる。マリアベルは一度でいいからサンメリア国に行ってみたいと考えていた。

「存じております。サンメリアが何か？」
カナリアがそう聞き返すとミルヴィンは瞳を閉じゆっくりとうなづいた。
「サンメリア国、第一王太子殿下ロード様が１６歳の成人になられた。その挨拶をと明日、この国に来る予定だ。マリアベル 」
そこで突然、名を呼ばれたマリアベルは名を呼ばれると思わなかったのでうわずった返事を返してしまった。
「お前も１５になったばかりだ。王太子殿下と年も近い…ロード様にこの国を案内してはくれぬか？」
マリアベルは父のその言葉を聞き驚いた。そのような大切な役はいつも長女のカナリアにきていたはずなのに今回は何故か一番末娘のマリアベルが指名されたからだ。
だが、王である父の言うことは絶対だ。マリアベルが返事を返そうとすると、口元に突然ルルベルの手が伸びてきて返事を遮った。そして、またもやカナリアが王に聞き返した。
「何故マリアベルなのですか？そのような大切なお役目は私の役目のはず。それに…それに……っつ！！！男という名のおぞましい生き物をこの国の宝であり私たちの可愛い！愛する妹であるマリアベルに近づけるなど！私は反対です！」
カナリアがそう言うと隣でマリアベルの口元に手を当てていたルルベルもうなづいた。
ミルヴィンはカナリアのその言葉と勢いに負けそうになりかけていたが、コホンと小さく咳をしてから椅子に座り直し言葉を返した。
「さっきも言っただろう。マリアベルは王子と年が近い。４つも年上のお前では王子がゆっくりできないでわないか。それに… 」
そう言うとミルヴィンは、はっと何か思い出したかのように口元に手をあてたがすぐに手を膝の上に下ろした。それを見逃さなかったカナリアは睨みつけるようにミルヴィンを見つめ聞いた。
「それに？」
「それに…ま、マリアベル！お前は歌が好きだろう！？前からサン

メリアに行ってみたいと話していたではないか！この国の王族は掟で他の国にたやすく足を運ぶことを禁じられている…。だから、ロード様にサンメリア国の事を色々聞いたらどうだ、と思ってな。」

## 月の姫（後書き）

皆さんはじめまして！（？）
こんにちは！ｗ
優姫です＾＾ｗ

これで作成中の作品なん作品目でしょう…今回の作品は学校で授業中、ウトウトしていたら突然頭の中にあらすじが浮かび上がってきたものです！ｗ

この作品は今のところの流れではおそらく、今まで私が作ってきたどの作品よりも少ない話数になると思います…。だからこそ！楽しく！恋愛的で！恋愛をするのが大好きな女の子の心をつかむような内容にしたいと思います！！

応援よろしくです！＾ｗ＾

この作品は『月の姫』と呼ばれたマリアベルの恋のお話です！カナリアとルルベルはどんな子達なのかは読者様のご想像におまかせしますが…一つ言うと妹馬鹿ですかね…ｗ妹が可愛くて可愛くて仕方のない姉設定で行こうと思います！
たま～～に「こんな姉やだ…」「いくらなんでもこれはありえなくね？ｗ」って感じのアタックシーンもあるかもしれませんが！
これはＧＬ作品ではありません…ｗそこらへん、ご了承ください！ｗ

それでは皆様。また最終話でお会いしましょうね＾＾ｗ

## ロード・ロベリア・メルツェッタ

マリアベルは少し考える素振りを見せたのち
「わかりました。私が案内させていただきます。サルーナ国恥じぬ案内をさせていただきますのでご安心ください 」
マリアベルのその言葉を聞くとミルヴィンはふぅ～っと溜息を付きながら背もたれに背を預けるように座った。
だが、カナリアとルルベルだけはミルヴィンを睨んでいた。二人の妹馬鹿さ加減は以上である。

次の日の朝

「サンメリア国第一王太子殿下の御成ーー！！」
黄金色の騎士服を着た男がそう叫びながら門を開けた。
開けた先には馬に乗った男たちがいた。先頭で馬を操っているのは髪の色が紫に近い青で瞳は空よりも薄い水色をしている。その男の後ろには黄金色の騎士服を着た男がざっと数えて３０人はいるだろう。
男たちが馬に乗ったまま門を潜り城の中へ入ると、門がゆっくりと閉ざされていった。
門が閉じると同時に男たちは優雅な動きで馬から降りる。すると、先頭にいた男がミルヴィンの方に歩み寄ってきた。
「お初にお目にかかります。ロード・ロベリア・メルツェッタと申します。この度の訪問をお許しいただきまことにありがとうございます。」
男はそう言うとミルヴィンの足元で片膝を床につけ頭を下げた。
ミルヴィンはそんな男、ロードの片方の肩に手をつき言葉を返した。
「うむ。このような遠いところまでよくおいでになりました。ささやかではありますが今宵はこの城であなた様の成人をお祝いするた

めのパーティーを催す予定でございます。それまでの間お体をお休めくださいませ。マリアベル 」
そう言うと、ミルヴィンは自分の後ろで見ているマリアベルに手を差し伸べ名を呼んだ。
「はい。お父様 」
名を呼ばれるとマリアベルはミルヴィンのそれに自分のそれを重ね、ミルヴィンの横に並ぶようにして歩を進めた。
「自己紹介をしなさい。」
「はい。サルーナ国第三王女ソルン・ロイド・マリアベルです。以後お見知りおきを 」
マリアベルはそう言いながらドレスの裾を掴み膝をまげ礼を取った。
「王子がこの国にご滞在の間、このマリアベルが国を案内をいたします 」
マリアベルが自己紹介をすると隣のミルヴィンがマリアベルの背に手を当てたままロードの方を向きそう告げた。
「このような愛らしい姫と一緒にいられるなど光栄でございます 」
ロードが微笑みながらそう言うと、マリアベルは『愛らしい』という言葉に反応し頬を薄く初めてしまった。
そんなロードのマリアベルに対する態度に怒りを覚えている者達がいた。それはミルヴィンとマリアベルの背後で立ち尽くし、何もかもを見ていたカナリアとルルベルだった。

「納得いかないわ！」
そう叫んだのはカナリアだった。
「姉様？ 」
聞き返したのはマリアベルだった。
「お父様は何か隠してるわ！私達の可愛いマリアベルを男の世話係にするなんて！」
「世話係だなんて… 」
ロードを迎え入れた後、カナリア・ルルベル・マリアベルは自室で

に戻って良いと言われたのでそのままマリアベルの部屋まで皆でやってきたのだった。
「わかったわ！？」
「？」
突然大声で叫んだカナリアの方をマリアベルはまた向いた。
「きっとお父様はあの王子に弱みを握られているのよ！それをいいことに王子はマリアベルに一目惚れしたからって近づく口実を考えたのだわ！」
そういう考えは考えられなくもない。この国の王族は確かに他の国に容易く行くことは許されてはいないが、自分の国にはいつなんどき足を運んでも構わないとされていた。
だがマリアベルはすぐに目を閉じ言った。
「それはありえません 」
「どうして？」
「私はそんな町で見かけただけで恋に落ちるほど綺麗ではありませんもの 」
マリアベルがそう言うと突然誰かの腕が首に巻きついて抱きしめてきた。それはルルベルだった。ルルベルはマリアベルを抱きしめると静かに言った。
「そんなことない」
「そうよ！何を言っているの！？あなたほど可愛くて、愛らしくて、見てるだけで話したくなくなる娘はこの世界どこを探してもいなくってよ！？」
ルルベルに続いてカナリアがそう叫んだ。
「ですが…。誰？ 」
マリアベルがカナリアに反論の言葉を述べようとすると誰かが部屋の扉をノックしたので、マリアベルは扉に向かって話かけた。すると扉の無効から思いがけない人物の声が聞こえてきた。
「ロードです。マリアベル姫様 」
その言葉を聞くとマリアベルは大きく目を見開き姉達の方を向いた。

姉達も同様に目を見開きお互いに顔を見合った。そして、マリアベルは急いでソファから立ち上がり扉の方にかけていくとすかさず扉を開けた。
そこに立っていたのは、やはりさっき挨拶を交わしたはずのロードだった。
「部屋に入っても構いませんか？」
ロードがそう聞くとマリアベルはすかさず返事を返した。
「はい。どうぞ。お入りください。今お茶を持って来させます。」
そう言うとマリアベルは部屋の外で控えていた侍女にお茶の用意をお願いした。
そしてロードが部屋に入り、そこにいた人物達に驚いた。
「おや、先客がいらっしゃったのですね…。来てはまずかったですか…？」
『いいえ。大丈夫です』とマリアベルが言おうとするとすかさずカナリアが返事を返してしまった。
「えぇ。今は私たち姉妹で優雅な一時を過ごしておりましたのに。ハエ（邪魔）が入ってきてしまいましたわ。なので構わなくて構いませんわ。ハエ（邪魔）なんかすぐにつぶしてゴミ箱に捨ててしまいますから 」
カナリアは嫌味ったらしくそう言うが、言葉はちゃんとお客様に対してだからか敬語を使っていた。
「そうなんですか。やはり女性なのですね。虫を早く外に追い出すだなんて 」
カナリアの言葉にロードは何事もなかったかのように微笑みながらにそう告げた。カナリアはそんなロードの態度に心の中で舌打ちをしていた。
マリアベルはそんな二人の会話をオロオロしながら聞いていたが、どうにかしなくては、と考え話を切り出した。
「え、えと。ロード様。何かご用があったのでは？ 」
そんなマリアベルの言葉にロードは『あぁ、そうだった』というよ

うに自分の片方の手の平にもう片方の手の拳をぶつけた。
「そうでしたね。マリアベル姫。夜のパーティーまでまだ時間はありますので、城の中を案内してはいただけませんか？」
「お体は大丈夫なのですか？隣国と言ってもサンメリア国は、この国から駿馬でも5日はかかるはず 」
「心配してくださってありがとうございます。ですが、これくらい平気でございます。お気になさらず 」
ロードがそう言うとマリアベルは返事に困りながらにカナリア達の方に視線を向けると、カナリアの視線を見て驚いた。カナリアは今にもロードを殺してしまいそうな目でロードを睨みつけていた。
――――姉様達のためにもロード様を部屋の外に出さないとダメかもしれないわね…――――
「ロード様がよろしいのでしたら、構いません。ご案内いたしましょう 」
マリアベルがそう言うと同時にさきほどの侍女がお茶を運んで来たので、マリアベルは申し訳なさそうに侍女にお茶を片付けてもらった。
「姉様方。少し部屋をでさせていただきます。パーティーで会いましょう 」
そう告げると、マリアベルはロードを連れ部屋を後にした。

「マリアベル姫は姉様方にとても気に入られておいでなのですね」
「はい。ですが…ちょっとやりすぎでは…？と思える時が良くあります…」
二人は城の通路を歩きながらにそう話し合っていた。マリアベルがそう言うと、ロードは薄く笑い声をあげた。
「ははっ。私もさきほどはハエと言われてしまいましたからね」
ロードが笑いながらにそう言うと、今まで忘れていたかのようにマリアベルが慌てながらにロードの前に立ち、深く頭を下げた。
「も、もうしわけありません！姉様達に悪気があったわけではないのです！お許しくださいませ！」
「謝らないで。お姉様方の気持ちわからなくもないから」
――――ロード様にもご兄弟がいらっしゃるのかしら？でも確かロード様は一人っ子のはず…？――――
マリアベルが考えているとロードが話の続きを話し始めた。
「私だって、もしこんな可愛い妹がいたら可愛くて可愛くて仕方がなくなってしまいます。きっと、お嫁にも出したくなくなるでしょう」
「へ？」
マリアベルはロードの言葉に頬を真っ赤に染めてしまった。
だが、ロードはそんなマリアベルの反応を楽しんでいるようだった。
「ところでー…」
すると、ロードは突然、話題を変えた。
「マリアベル姫は歌がお好きなのですよね？」
そう聞かれ、マリアベルは表情をいっきに明るくして元気に返事を返した。
「はいっ！！」
そんなマリアベルの表情を見てロードは一瞬驚いたような表情を見

せたが、すぐに元の表情に戻り話を続けた。
「姫は町では『月の姫』と呼ばれているのですよね？その名のとおり美しいほどの髪と瞳の色ですね。そして、歌も上手いだなんて。一度聞かせていただいても構いませんか？」
しかし、マリアベルは一生懸命顔の前で手を振り言った。
「そ、そんな！私の歌なんて…ロード様にお聞かせするほどのものではありません…。それにロード様の国は音楽が盛んな国。すばらしい歌姫の歌をたくさん聞いてきているでしょう？私は足元にもおよばず恥ずかしいです…」
「上手い、下手なんてありません。ただ、ただ歌を、楽しく歌えればそれで構わないのですよ。歌というものは真面目に綺麗に歌うためのものではありません。楽しく、聞いてくれている相手の事を思って歌うものです。大丈夫、あなたの歌は誰の歌よりもすんだ歌声のはずです」
そしてロードにもう一度『聞かせていただけませんか？』と微笑みながらに聞かれたマリアベルは頬を薄く染めたまま小さく頷いた。

マリアベルとロードは城にある一つの部屋にやってきた。そこは昨日、マリアベルがピアノを弾きながら歌を歌っていた部屋だ。
ピアノの傍に行くとマリアベルはゆっくりと息を吸って歌い始めた。
「心～のこ～えを～あなた～にき～かせ～」
マリアベルが歌っているのを離れたところからロードが見つめていた。
ロードの表情はどこか、愛しい者を見守っているような表情だった。
――――やっと、やっと見つけた。私の――――――
マリアベルが歌い終わると拍手の音が聞こえ、聞こえる方に視線を向けると、そこにはロードがいた。マリアベルはその場で頬を真っ赤に染め下を向いてしまう。
「素晴らしかったですよ。姫。今のは『女神の悲愛』ですね。姫はこの曲の物語をご存知で？」

突然問われ、マリアベルは首をかしげてしまう。するとロードは一つ頷くと語りだした。
「昔、ある遠くの国の森の中にあまり他の村の人たちには知られていないほど奥に一つの村がありました。その村にはそれはそれは美しい身なりで歌声のすばらしい女性が住んでおりました。ある日、その女性が森の中で木の実を拾っていると、一人の若い青年が倒れていました。女性は急いで自分の家へ青年を連れて行き手当しました。その後青年は傷も綺麗に治り、女性に助けてもらった礼に家の仕事を手伝いました。次第に二人は恋に落ち、最後には子どもができました。ある時、女性のお腹にまだ子どもがいる時、青年が女性に話しがあると呼び出し言いました。『私は隣国にある大国の王子なんだ。君を妃に迎えたい』と言われました。すると、女性は喜びの表情を浮かべた後悲しみの表情をうかべて言いました。『申し訳ありません。あなたと行くことはできないのです。』青年がその訳を聞くと『私は神に遣わされて月の女神になるために地上に降りた者なのです。私はもう天上世界に戻らなければなりません。』女性の話を聞いた青年は驚きました。その次の日、青年が布団の中で目を覚まし、横の布団に視線を向けると女性の姿はなくなっていました。青年は探しましたが、どこにも女性の姿はなく、青年は女性への気持ちを心に残したまま村を後にしました。青年が帰って行くところを天井世界から見つめていた月の女神は1曲の歌を歌いました。それが『女神の悲愛』と呼ばれているんです。女神のお腹にいたはずの子どもがその後どうなったのかわ、誰も知りません」
そんな話があったのかと口に手を付け薄く瞳に涙を浮かべてしまっていた。
ロードはそんなマリアベルに手を差し出し人差し指を瞳にあて涙を拭ってくれた。
「泣かないでください…。あなたに泣き顔は似合わない…。それに、女神と青年はそんな別れになりましたが、きっと女神の子どもがこの世界で家族をもって幸せに暮らしていると私は思うのです。なの

で、泣かないで。女神もきっと自分の子どもが幸せであることに喜んでいるはずだから 」
そう言うロードの視線をマリアベルの視線が重なり、二人はしばらく見つめ合っていたが。突然の声に驚いてしまった。
「な、ななななな何をしているの！！？？」
二人は視線を放し扉の方に向くと、そこにはワナワナとこちらを見ているカナリアとルルベルの姿があった。カナリアはマリアベルの表情を見るなり、ルルベルとともに駆け寄りマリアベルを二人で羽交い締めに抱きしめロードを睨みつけた。
「サンメリア国第一王太子殿下ロード様！我が国の宝であり私たちの可愛い妹のマリアベルを泣かすとはどういう事かご説明を！」
『内容によってはしばくぞこら』と、語っているような目でロードを睨みつける。
ロードは1歩後ろに下がり、降参と言うように両手を顔の前まで上げ、カナリアたちに平を見せながら言った。
「も、もうしわけあり…」
「姉様方…。いい加減にしてください…」
ロードが謝罪の言葉を言おうとするとマリアベルの声がそれを遮った。
マリアベルが小刻みに震えながらそう言うと、カナリアとルルベルはすぐさま抱きつく手を放し1歩マリアベルから離れて言った。
「だ、だってあなた泣いているじゃない！この男にいじめられたからじゃ！」
カナリアがそう言うと、カナリアの隣まで歩み寄ってきたルルベルがコクコクと頷いた。
「わ、私が泣いているのにロード様は関係ありません…。突然現れて、早とちりしたあげく、お客様であるロード様に暴言を吐くなど言語道断！！ロード様にお謝りください！！」
突然マリアベルが怒鳴った。一瞬だったがマリアベルの横に巨大な大蛇が姿を表したようだった。

カナリアとルルベルは同時に「ヒイイ！！」と叫び。「申し訳ありませんでした！」とロードに頭を下げ走って行ってしまった。
――――まったくもう！姉様方ったら！――――
マリアベルが腰に手を当て息を荒くしながら、カナリア達が出ていった扉を見つめていると、背後で笑い声が聞こえてきて。マリアベルが声のする方を向くと、ロードが笑いを一生懸命堪えようとしているが、たえられず口と目がニヤケ笑い声を出してしまっているところだった。
それで、やっと今の状況に気付いたマリアベルは即座に頭を下げロードに謝罪した。
「お、お恥ずかしいものをお見せして申し訳ありませんでした！」

## 泉

「い、いえ……す、すみません…」
まだ収まらないのかクスクスと笑っているロードにマリアベルは頬を真っ赤に染め俯いている。
笑い終わるとロードは一つ深呼吸をしてから会話を始めた。
「今日はとても良い日ですね 」
微笑みながらそう言い出したロードに『そうなんですか？』とつい聞き返してしまった。
「えぇ。だって姫のあんな一面が見られたのですから 」
そう微笑みながらに言われマリアベルは再び頬を染めてしまった。
「ところでー…」
そこで突然またもや話を支えられてしまったマリアベルは不思議そうにロードの方に視線を向けた。
「マリアベル姫。あなたは5年前にサルーナ国の東、サンメリアにもう少しで入るところに大きな泉がありますよね？あそこで歌を歌っていたことはございますか？」
そう問われ、マリアベルはしばらく考えた後返事をした。
「はい。あります。あの日、私は１０歳になって生まれて初めて城の外に出ることを許され嬉しさのあまり従者などを置いてそのままサンメリアがある寸前まで行き、あの泉を見つけてあまりにも綺麗な場所だったので歌を歌ったのです。それが何か？」
王族は１０歳を迎えるまでは城の外に出ることを許されず、町の者達に存在を知られることもできなかった。１０歳の誕生日に初めて盛大にパーティーをして姫の存在を世の者に知らせるのだ。
「いえ。なんでもありません。教えていただきありがとうございます 」
そう言うとロードはマリアベルに深く頭を下げた。
そこでマリアベルは何か思い出したかのように『あっ』と声を上げ、

瞳を輝かせながらロードに言った。
「ロード様！今日のパーティーで私歌を歌うことになっております。楽しみにしていて下さいね！大きく盛大なパーティーでは私が歌を披露することになっているんです！お母様やお父様もいらっしゃるので私頑張ります！」
マリアベルのその言葉を聞くとロードは表情を曇らせてしまった。何かいけないことを言ってしまったかと思いマリアベルはロードに問いかけた。
「ロード様…？どうかなさいましたか？」
「あ、い、いえ。ただ、パーティーで歌を披露されるということは、マリアベル姫はダンスはおやりにはなられないのですよね…？」
どうしてそのような事を聞かれるのかマリアベルにはわからず、とりあえず聞かれた事に答えた。
「いえ、ずっと歌っているわけではありません。前半だけです。後半は演奏楽団などのすばらしい演奏がホールに響くことでしょう」
それを聞くとロードはいっきに表情を明るくすると、マリアベルの手を取り言った。
「それでは、ダンスのお相手をさせていただいてもよろしいですか？歌い終わった後ステージ傍まで迎えに行かせていただきますので」
手をもたれ、そのまま微笑みながらに聞かれ、マリアベルは頬を薄く染め『はい』と返事を返した。

あの後、ロードは元来たマリアベルを部屋まで送っていくと『それでは支度が済んだら迎えに参ります』そう言って自室に戻って行った。
マリアベルは部屋で着替えをしていると突然誰かにノックをされロードかと思い、侍女にノックした人物を確かめてもらおうとすると、突然扉が勢いよく開けられ。マリアベルを強く抱きしめた。
部屋に入ってきたのは瞳と同じ色のドレスに髪には珊瑚をモチーフ

にした髪飾りをぶら下げ、片手には扇子を持ち首には髪と同じ色に光輝いている宝石のついたブレスレットをつけたカナリアとクリーム色のドレスに蝶と春の花をモチーフにした髪飾りに扇子を持ち首には赤い炎のような色の宝石のうまったブレスレットをぶら下げたルルベルだった。

「マリア！！！さっきはあの後大丈夫だった！？いじめられなかった！？あの時は、あなたが怒ってたから退いたけどずっっっっっっっっと心配してたんだからね！！！」

確かにさっきは怒ってしまったが、マリアベルは正直に言うとカナリアやルルベルからこのように心配されるのが嫌いではなかった。カナリアがマリアベルを抱きしめながら叫ぶようにして呟いていると、ゆっくりと歩み寄ってきたルルベルがマリアベルの前で足を止め無言でコクコクと頷いていた。どうやらルルベルもカナリアと同じ考えだったようだ。

「私も、さっきは怒鳴ってしまってごめんなさい姉様方…」

カナリアの腕の中でマリアベルが元気なさげにそう呟くと、マリアベルの頭の上に乗っていたカナリアの手が、まるで頭をなでるように上下に動き。

「大丈夫よ。あれは私たちが悪かったんですもの。大切な妹に虫がついたらいやだからってずっと二人の後を付けて行って、あげく部屋から歌声が聞こえなくなっても二人が出てこないのが心配になって覗いてしまった私が悪いんだもの。ごめんなさいね。でも、私達の気持ちもわかってね」

「後付けてたんですか…。ですが、カナリア姉様。ロード様は悪い方ではないと思います。とても優しい方です。それに、あの優しさはおそらく私限定のものではなく世の女性皆さんに同じような優しさをお見せしているんだと思います。なので姉様方が心配するような事はございません」

マリアベルがそう言うと、カナリアはマリアベルから少し離れ、頭に乗せた手をまた上下に動かしながら言った。

「そう…。わかったわ。あなたがそこまで言うのなら…少しだけ、信じてみましょうか 」
カナリアのその言葉を聞くとマリアベルは俯いていた顔を上げ、カナリアの方を見ると、カナリアは微笑んでいた。
そしてつられるようにしてマリアベルも微笑みを返した。
「っつ！ありがとうございます！カナリア姉様！！」
そう言うと、そのままルルベルの方に視線を向け、聞いた。
「ルルベル姉様は… 」
マリアベルからそう聞かれると、ルルベルは一瞬カナリアの方に視線を送ってから
「私も、いいわ 」
と、だけ言った。
ルルベルのその言葉を聞くと、マリアベルは今までにしたこともないような笑みを作り
「ありがとうございます！姉様方！」
と、い言った。
その後、マリアベルは大急ぎで用意されていたドレスに腕を通し、カナリアに髪を結ってもらった。
マリアベルのドレスは、薄い青色のドレスに靴はまるで透明のように白く美しい靴に、髪には真珠を散りばめ、結った部分には月をモチーフにした美しい黄金色の髪留めをつけ、首には現在の王妃であるマリアベルの母から子どもの頃にもらった青銀色をした宝石をつけたネックレスとぶら下げていた。
「さぁ、お父様やお客様方がお待ちだわ。行きましょう 」
そう言ってカナリアはマリアベルに手を差し出すが、マリアベルはその手を取らずに首を振りながら顔の前で両手の平をカナリアに見せるようにして横に振った。
「マリア？どうし…」
カナリアが不思議がり一歩マリアベルに近づこうとすると、戸を誰かにノックされた。

「どなたかしら？」
カナリアがそういうと同時に次女が扉を開け、ノックした人物に目をやるとマリアベル達のほうに視線を送り告げた。
「メルツェッタ王太子殿下のお見えです 」
次女のその言葉を聞いてからマリアベルは視線を少しカナリアのほうにむけると、カナリアの額にうっすらと怒りマークが浮かび上がっているのにおびえてしまった。
「……入っていただいて 」
「かしこまりました。 どうぞ 」
促されるように部屋に入ってきたロードはマリアベルを見るなり目を見開いて、口を開けずに放心したようにその場にたたずんでしまった。
――――――どうなさったのかしら？――――――
「ロード様？」
マリアベルが不思議そうに訊ねると、我に返ったようにロードは見開いていた目を細め言った。
「あ…。し、失礼いたしました…あまりにも…あまりにもお美しくて…釘づけになってしまいました… 」
そう、愛おしい者を見つめるような瞳で見られながら言われると、マリアベルは目を見開いて頬を染めてしまった。
「ロード様もお似合いです 」
ロードは、金糸でところどころに飾られた、青色の服を着ていた。

**ワルツ**

そう言われると、ロードは床に片膝をつく格好になり瞳を閉じ、片手を胸にあて

「お褒めに預かり光栄にございます 」

と言った。マリアベルは頬を薄く染めたまま微笑んだ。

そんな二人のやりとりを見ていたカナリアは二人の間に割って入り、ロードに言った。

「殿下、何用でしょう？これからあなた様のお祝いの宴。なのに何故こちらに？」

ロードを睨みながらに言うと、ロード本人、睨まれていることがわかっているはずなのに静かに答えた。

「マリアベル姫とご一緒に行こうかと思いまして。さきほど別れるときそうお伝えしたのですよ。『支度を終えたら迎えにあがります』と、そして支度がすんだので迎えに上がったんです 」

そう微笑みながら言うロードを無視して、カナリアは後ろにいるマリアベルの方に向き直り、ロードに見せていた表情とは真逆の表情を作った。

「本当なの？マリア 」

「あ…。はい。そうお約束いたしました 」

マリアベルがオズオズとそう答えると、カナリアは笑顔のまま後ろにいるロードのほうに振り返りまた睨むようにして言った。

「……そうですか。わかりました。ではどうぞ、後でお越しください。リードのお相手を『今回だけ！！』お譲り致します 」

カナリアのその言葉を聞くなり、ロードはある言葉に疑問をもち聞き返してしまった。

「『後でお越しください』とは？」

ロードのその言葉を聞くなりカナリアは勝ち誇ったかのような表情を作り、言葉の意味を教えてくれた。

「あら、ご存知ないのでしたね。今日のような盛大なパーティーの日は『月の姫』と称されたマリアベルがステージの上で歌を披露するのです。なので、マリアベルは私たちより後に広場に入ることになるのです。その時、マリアベルと連れなって入ってくる者はマリアベルと深く関係のあるものか仲のいい者と決まっております。いつもは、私達がマリアベルと一緒に広場に入っていたのですが。致し方ありませんね」
そういうなり、カナリアは『ルル行きましょう』と言い部屋を後にした。
「そのような大役…私のような者がやってもよろしいのですか？」
カナリアとルルベルが部屋を出ていくところを見送っていたロードは、扉が締まるとマリアベルの方に視線を送りそう聞いた。
「構いません。決まっていると言っても、そんなに大事なものではありませんので。ですが、ロード様がお嫌なのでしたら…」
マリアベルがそこまで言うと、ロードは大きく首を左右に振り両手のひらをマリアベルに見せるようにして顔の前で横に振って言った。
「とんでもない！そのような大役をさせていただけることとても嬉しいです」
「良かった」
ロードの言葉にマリアベルは嬉しそうな表情を作って返した。
そうやってしばらく二人は楽しい一時を過ごしたのであった。
二人で話をしていると部屋の扉をノックされ、マリアベルとロードはソファから腰を上げた。
「はい」
マリアベルがノックに答えると、扉の向こうから若い男の声がした。
「マリアベル姫様。お時間です。広場にお越しください」
「わかりました」
マリアベルがそう答えると、ロードがまたもや床に片膝を付き片手を胸に当て、もう片方の手を頭より上に上げマリアベルの方に差し出した。

「それでは姫。まいりましょう 」
「はい 」
そう返事を返すと、差し出された手に自のそれをゆっくりとのせた。
ロードはのせられた手をもう片方で掴み、自分の二の腕のところまでもってあげると、そのまま立ち上がって歩きだした。
そんな二人を微笑みながら見ていた次女はゆっくりと扉を開けてくれた。

パチパチパチパチ
二人はライトに当てられながら広場へと歩を進めて行った。
「おや。今日は姉君達ではないのですね。あのお方は… 」
招待客の一人がそう呟いた。すると、隣に立っていた客が質問に答えた。
「あの方はついこないだ成人になられたばかりのサンメリア国第一王太子殿下のロード様ですよ 」
「ほう…あのお方が…。マリアベル姫とご一緒に入ってくると言うことは親しいご関係なのか…? 」
「さぁ。それは私にもわかりかねますね 」
マリアベルとロードはステージ傍まで来ると、腕に当てていた手を放した。
「それではロード様。行ってまいります 」
「いってらっしゃい。マリアベル姫 」
「マリア…とお呼びください。マリアベルだと長いでしょう 」
マリアベルは階段を三段ほど上がった上からロードにそう言いながら微笑んだ。
ロードも負けじと微笑み返した。
「それでは…マリア。いってらっしゃい 」
「はい！行ってまいります！」
マリアベルはロードに『マリア』と呼んでもらったのが嬉しいように満面の笑みを作りステージの中心まで行った。

そして美しい歌声を披露してくれた。客達は、マリアベルの歌で踊る者もいるが、歌をただずっと聞き入っている者もいた。その中にはロードもいた。
ロードはステージ斜め前にあるテーブルの傍でグラスを傾けながらマリアベルの歌っている姿を見つめていた。
「殿下　」
そんな時背後から誰かに声をかけられ、ロードはマリアベルから視線をはずし、そちらに目をやった。声のしたほうに立っていたのはミルヴィンだった。
「陛下。今宵、このような素晴らしい宴を開いていただき誠にありがとうございます　」
ロードはミルヴィンに近寄り、そう言って礼をした。
「いえいえ。せっかく成人を迎えられたのだ。盛大にやらねばと思っただけです。ところで殿下…」
そこで突然ミルヴィンは少し真面目な表情を作りロードに詰め寄った。
「マリアベルはどうでしたか？　」
そう告げながらステージの上で歌っているマリアベルにミルヴィンとロードが視線を移した。
「えぇ。想像以上に素晴らしい女性です…。探し求めていた方でした　」
「そうでしたか。やはりあの子が…それでは、あとはあの子の心次第とさせていただきましょう　」
「はい。わかりました　」
二人はそこまで話し合うと再び礼を仕合い離れて行った。
歌を歌い終わると、マリアベルは階段をゆっくり降りていった。降りている最中に横から手を差し出された。差し出した人物に視線を向けると、階段横には立っているのはロードだった。
ロードはマリアベルと視線があうとすぐに『素晴らしかったです』

と答えてくれた。マリアベルはそんなロードの言葉に満面の笑みを返した。
二人はその後素晴らしい演奏楽団の曲に合せワルツを踊った。
「マリア。疲れたでしょう。飲み物を持ってくるので待っていてください」
ロードはそう言うと、テーブルに向かって歩いて行った。マリアベルはそのまま、ベランダに出て疲れきって火照った体た顔を外に涼しい風にあてた。
「ふぅ…。こんなに踊ったのは久しぶりだわ」
――――――――いつもは、姉様方傍で守るようにして立っているから誰もダンスに誘ってくれないのよね…。いくら姉様方でも今日は遠くで見ていたようだけれど…――――――
風にあたりながらそう考えているマリアベルを隠れて見ている者がいた。ロードだ。
隠れているわけではない。背後からマリアベルの姿に見とれてしまっているだけだ。腰まであるだろう髪を風にそよがせている彼女は女神のように美しかった。

## 次の月の女神

女神の姿を見たことはないが。きっとこんな姿なのだろうと想像できるほどにマリアベルは美しかった。
そう、そしてあの日の彼女もとても綺麗だった。

ロードは5年前のある出来事の事を思い出していた。

あの日、ロードは父親に連れられてサンメリア国とサルーナ国のちょうど境目にある小さな町に用事があり行っていた。その日、その町では何かあるのかたくさんの人で賑わっていた。そのおかげでロードは父親とはぐれてしまい、仕方なく町の外にある泉の元までやってきていた。町の中を探しても自分が見つからなかったら父は必ず外を探すと思ったからだった。
寂しさで泣きそうになっていたロードは頑張って涙を流さないようにしたた。
「もう11歳になったのだから泣かないぞ…立派な王子となりサンメリア国を裕福な国にするんだ！」
11歳のロードは既に大人顔負けのような考えをもっていた。
ロードは泉の水で顔を洗い、泣き顔を消そうと考え泉に近づくと歌が聞こえてきた。声はとても幼いがとてもハリのある美しい声だった。
――――誰か歌ってる？美しい声だな…我が国の者か？いや、こんな歌声の者がいるのなら今頃歌劇場で歌っているはずだ。美しい…もっと聞いていたい…――――――
幼心でそう考えたロードは泉に近づくと、声のするほうに視線を向けた。
泉の畔、ロードのいるところとは真逆のその場所に歌声の主は立っていた。

見た目でいうと１０歳か９歳だろうと思われるその少女は瞳を閉じ両手を胸にあて少し顎をひき上を向くようにして歌っていた。歌声も美しいが彼女のその存在自体が美しかった。少女の髪は青銀色をしていた。瞳の色も見たかったが見ることはできなかった。歌っていたからだ。

しばらく美しい歌に聞き入っていたロードは静かに眠りについてしまっていたらしい。気付いた時には城の自室の寝室にいた。

父のところに行ってみると『泉でお前が眠っていたので連れてきたが、お前以外に誰もいなかった』と言われてしまい。あの少女の事はわからずじまいだった。

それからというもの、幼いロードは毎日のように町に出ては少女を探した。ここは音楽が盛んな国サンメリア国だ、彼女のような美しい歌声の持ち主なら絶対この国にいるはずだと思ったからだ。

だが、３年４年かけてもそれらしき少女はいなかった。ある日、成人を迎えた日彼の城では誕生の宴と言うことでパーティーが催された。

そこでミルヴィン王と初めて会話をしたのだ。ロードはミルヴィンにその少女の話をした。すると『青銀色の髪…ですか…我妻が青銀色の髪と瞳をしておりますが？歌もそれなりだと思われます』そう言うと、『妻』と呼んだ女性を自分の傍へと呼び寄せた。その女性は確かに青銀色の髪と瞳をしていたが、違った。いや、彼の中の何かが違うと訴えていたのだった。ミルヴィンが女性にロードが探している少女の話をすると話しかけてきた。

「陛下。マリアベルのことをお忘れになられないでくださいませ」

女性のその言葉を聞くとミルヴィンは『おぉ！そうだったどうだった』と笑い出した。そして言った。

「殿下、私の家族にはもう一人青銀色の髪と瞳、そしてその歌声は月の女神のようだと言われている娘がおります。年もちょうど１５歳になったばかり、殿下の探している少女と一致するのではないでしょうか」

ロードはミルヴィンのいう『月の姫』に希望を託したのだった。

いつしか、マリアベルがロードの存在に気付き声をかけてきた。
「ロード様。おかえりなさい 」
ロードは我にかえるとマリアベルの元へ歩み寄った。
「お飲み物をどうぞ 」
「わざわざお客様であるロード様に持ってきていただいてすみません…」
グラスを受け取ると、マリアベルは沈んだ表情でロードにそう告げた。
「構いません。私が好きで持ってきたのですから、あまりお気になさらず 」
ロードがそう微笑みながら告げると、そんなロードの表情を見たマリアベルがちょっと安心したかのように微笑み返したのだった。
その後、マリアベルとロードは楽しい一日を過ごしたのだった。

パーティーがあった日の夜、寝着に着替え終わり、鏡の前にある椅子に腰かけマリアベルの長い綺麗な髪を次女が櫛で吸いていると、少し微笑みながらマリアベルに話かけてきた。
「姫様。どうなさいました？なんだかとても…楽しそうですわ 」
次女にそう聞かれ、マリアベルは一生懸命首を横に振って否定した。
「な、なんでもないわ！」
そんなマリアベルの態度に次女は『ははぁ～～ん』と言いながら横目で鏡に写ったマリアベルを見つめた。
「な、なぁに？」
マリアベルが聞くと次女は口元に片手を当てて言った。
「姫様。もしや…恋…ですか？ロード様に恋なさったのでは？」
「な！なにを言うの！？ロード様とは今日あったばかりの人なのよ！？恋のはずないじゃない！…」
そう言うと、マリアベルは頬を真っ赤に染めたままそっぽを向いて

しまう。
「恋に時間は関係ありませんわ。姫様。心の中に居座ってしまい…忘れることができなくて…その人の笑顔を微笑んだ表情をもっと見ていたいと考えておいでなのでしたらそれは間違いなく恋ですわ」
次女にそう言われると、マリアベルは突然立ち上がって寝室のベッドの方へ行ってしまう。
「も、もう寝るわね！おやすみなさい！」
マリアベルがそう言いながら寝室の扉を開け中に入っていくと、それを見送っていた次女は「おやすみなさいませ」と言い返したのであった。
マリアベルはその日、不思議な夢を見た。

「ここはどこ…？」
マリアベルは不思議な場所に立っていた。
足元には何か白くてフワフワしたものがあり、とても歩きにくくなっていた。頭上には空のような美しい水色の景色があった。
「ここは…もしかして…雲の上…？」
マリアベルは歩きにくい足場をなんとかして歩いては前に進んで行った。
しばらく歩いて行くと、空が段々暗くなってきた。夜になったのだろう。夜ということは月が上がるはずだ。だが一向に月は上がってはこなかった。
不安になりながらに歩いていると、地上で悲鳴が聞こえてきた。マリアベルは不思議になり雲の切れ目から地上を覗いた。地上はちょうどマリアベルの国サルーナ国だった。
砂漠には砂しかないはずなのに何か黒い生き物がたくさんはびこっていた。よく見ると、町の中にも同じような黒い物がいた。どうやら悲鳴は、その黒いものに襲われている町の人達の声のようだった。
「な、何？あれは…」
「あれは無魔です」

突然背後から澄み切った美しい声が聞こえてきて、マリアベルは振り向いた。そこには、体から青銀色の光を放った髪と瞳の色がマリアベルと同じ女性が宙に浮いていた。女性は悲しそうな瞳でマリアベルを見つめていた。
「あなた…は？」
マリアベルがそう聞くと、女性は悲しそうな瞳のまま口角を上げ質問に答えてくれた。
「私に名はありません…。地上の者達は、私のことを「月の女神」と呼びます 」
そう答えられたマリアベルは驚きのあまり立ち上がってしまった。
「つ、月の女神様！？こ、こんにちわ！」
マリアベルがそう答えながら深く頭を下げると、顎に手を当てられ前を向かせられてしまった。
「そのように敬う必要なありません。マリアベル姫。あなたは私の娘。次の月の女神なのですから 」
「…え？」
マリアベルが不思議な眼差しを月の女神に向けると、女神は雲の切れ目から地上を見て言った。
それにつられマリアベルも地上に視線を向けた。
「あの、黒い者達は『無魔』と言うもの 」
「無…魔…？」
マリアベルが地上に視線を向けたままでそう言うと、女神も同じく地上に視線を向けたまま頷き続きを語った。
「無魔とは、暗闇から生まれでる者。生まれてきたらあのように人間を襲い、己のかてとする者達。ですが、彼らに唯一対抗する手段があります 」
「それは…？」
マリアベルがそう聞きながら女神の方に視線を向けると、女神はまだ地上に視線を向けたまま続きを述べた。
「それは月の女神です。無魔達は暗い闇から生まれます。唯一彼ら

に抵抗できるのは神に見初められた月の女神の加護だけです。無魔達は月の女神の光にあてられると灰となって消えてしまいます」
女神のその言葉を聞き、マリアベルは一つ疑問を覚えて、つい女神に聞いてしまう。
「ですが、女神様はここにいらっしゃいます」
そこでやっと、女神はマリアベルへと視線を写し、首を横に降った。
「私たちが今見ているのは未来の世界。私があなたに会うため、あなたに指名を教えるするために未来の夢をあなたに見せているのです」
女神のその言葉を聞き、さきほど自分が女神からなんと呼ばれたのか思い出したマリアベルはそのことに付いても聞いてみた。
「指名…？あの、そういえばさっきもおっしゃっていましたが、次の月の女神とは…？」
マリアベルがそう聞くと、女神は立ち上がる。するとまた女神の体からまばゆい光が溢れ出し宙に浮いた。
「あなたは『女神の悲愛』の物語をご存知？」
問われ、マリアベルはただ頷くだけの行動をした。すると、女神は一つ頷いてから話を続けた。
「あの物語は本当にあった話です。そして、その物語に出てくる月の女神というのは私です…。私が月の女神となってからもう何百年も立ちました。私もそろそろ力尽きる頃…そうなる前に誰かに私の後を継がせなければなりません。物語には私は身篭っていたとありますね。その赤子はどうなったかご存知ですか？」
そう聞かれ、マリアベルは首を横に降った。
「あの人の…彼の目の前から消える寸前、私はお腹にいる赤子の卵子をそのまま他の村の心優しいと噂の夫婦の女性のお腹へとうつしました。赤子はそれから無事生まれました。それからもう何百年もたちましたが、月の女神となった私の血は薄くなることもなく、譲り受け続けています。そして、マリアベルあなたの母も私の生まれ変わりなのですよ」

そう言われると、マリアベルは驚きで目を見開いた。
「で、では、母様も次の月の女神候補なのですか？」
と聞くと、女神は悲しそうな表情のまま首を横に降った。
「いいえ。彼女には私の後を継ぐほどの光は備わってはおりません。ですが、マリアベル。あなたにはその光があります。あなたは今までに産まれた私の子供たちの中で一番より濃く私の血を受け継いでいるもの。だから、あなたを次の月の女神と決めたのです。さきほどの未来は、あれは私が力尽き女神としての光を放てなくなってからの世界です。あなたが月の女神とならなければ、サルーナ国は…いえ、世界は闇に覆われ、どこからか無魔達が姿を表し夜の間だけ地獄を見せる事になるのです 」
「そ…そんな…」
「それに…」
驚いた表情を崩せないでいるマリアベルに女神は話を続けた。
「それに、彼女では私の後を継げない理由がもう一つあるのです 」
「そ、それは…？」
「彼女は本物の恋を知ってしまいました。恋をし、結ばれることで女神の血の中にある神の力が消え失せてしまうのです。マリアベル、お願いです。私の後を継ぎ、次の女神となってください。そうでなければ世界が…」
女神がそう告げると同時に雲の切れ目が大きく広がりマリアベルの足元に穴を開けた。マリアベルはそのまま真っ逆さまに落ちて行ってしまった。
――――――私は死んでしまうの！？こ、怖い！！！――――――
そう心の中で叫びながら強く目を瞑った時、脳裏にさきほどの女神の声が響いた。
――――今すぐ答えてとは言いません。待ちましょう、あなたの１６歳の誕生日の夜まで――――――

## 夢

次に目を覚ますと、自分の寝室だろう天井が視界に入った。
マリアベルはゆっくりと体を起こすと夢で見たことを思い出した。
『あなたを次の月の女神と決めたのです』
夢の中でマリアベルは現在の月の女神にそう言われた。
「私が次の月の女神…」
そう呟くと自然に涙が流れてきた。
夢の中で女神はこうとも言っていた。
『サルーナ国は…いえ、世界は闇に覆われ、どこからか無魔達が姿を表し夜の間だけ地獄を見る事になるのです』
この国が、この世界が闇に覆われ無魔がはびこると言うことは、姉様方や父様、母様、そしてロード様や国の者達が傷つくと言うこと。そのような事を言われてしまっては、マリアベルは「月の女神などにはなりたくない」などと言えなくなってしまう。大切な人たちが死んでいくところを、傷つくところを見たくないのだ。
「どうしたら…」
そう言いながら両手で顔を覆うようにして俯き涙を流していると、寝室の戸をノックされた。
「姫様。お起きになられましたか?」
次女の声だった。次女はいつもそう言うと、返事がないとそのまま寝室に入りマリアベルを起こしてくれるが、今日はあの夢のおかげで早くに目を覚ますことができたのでマリアベルは次女に答えた。
答えるとすぐ、膝の上にかけてあった布団で涙を拭いて、戸の方に視線を送った。ちょうどそのとき、次女の手によって戸を開けられるところだった。
「おはようございます。マリ…ア…ベル様?」
何故か疑問形の言葉をかけられたマリアベルは首を傾げ、次女に問いた。

「どうしたの？」
「い、いえ。一瞬、お元気がなさそうに見えたもので…」
次女はマリアベルの横までやってくると「失礼いたします」と声をかけ、マリアベルの額に手を添え体温をはかり始めた。元気がないように見えたのを気分が悪いと誤解したようだ。
マリアベルはすぐ、次女の手をゆっくりと払いのけた。
「熱はないわ。大丈夫よ。おかしな夢を見てしまっただけ 」
「そうですか…。それではご朝食はこちらでお召になられますか？」
「いいえ。大丈夫よ 」
そう言うと、マリアベルはベッドから降りた。そのまま次女と共に寝室を出て、部屋でドレスに着替えていると部屋の戸を誰かにノックされた。
次女が戸の方に寄り、少し開けノックした人物を確かめると戸を締めマリアベルに扉の向こうにいる人物の名を告げた。
「メルツェッタ王太子殿下のお見えです 」
「少しお待ちいただいてちょうだい」
そう言うと、「かしこまりました」と次女が言うと戸を開け戸の向こう側にいるはずのロードにそう伝えてもらった。
伝えると、すぐにマリアベルの元まで戻ってきた次女は、マリアベルに鏡台の前の椅子に座るよう促し、座ると髪を結い始めた。
今日の髪型は耳の前に垂れている髪を三つ編みにするというものだ。それが終わると、もう片方の耳の前に垂れている髪を三つ編みにし、その二つを後ろまで持ってくると頭の上から少し下のところで三つ編みと三つ編みで結び完成だ。
「ロード様をお呼びして 」
「かしこまりました 」
次女は一礼すると、戸の方に行き先ほどのように戸を少し開け戸の向こう側にいるはずのロードに声をかけた。
「御支度の準備が終わりましたので、お入りください 」
そう言うと、すぐに戸を大きく開き中にロードを促した。

「ありがとう。失礼するよ 」
「おはようございます、ロード様。お待たせして申し訳ありません 」
マリアベルは椅子から腰を上げると、ロードに笑顔で微笑みながらそう告げた。すると、ロードもつられたように笑顔を作り答えてくれた。
「おはようございます、マリア。謝らないでください。女性は支度に時間のかかるもの、それを分かっていながら早く貴方に会いたいがためにこのような早い時間に部屋に来てしまった私がいけないのです。お許しください 」
「ところで、ロード様。昨夜は良くお眠りになられましたか？この国にきて初めての夜でしょう？」
ロードはマリアベルの部屋に入るとソファに腰かけ、次女の入れてくれた紅茶を一口口にすると、マリアベルの質問に答えた。
「えぇ。おかげさまで、良い夢を見ることができました。特に昨日はマリアのような姫に会えた日だからいつもよりもグッスリ眠ることができましたよ 」
ロードはそう言うと、マリアベルにそっと微笑みかけた。
すると、そこでロードは「ところで…」と話を続けた。
「マリア。ご気分でもお悪いのですか？あまり元気がないように思えるのですが… 」
マリアベルは慌てるように両手を顔の前で横にブンブン振り、ロードの言葉に答えた。
「そ、そんなことありませんよ！？私はいつもどおりでございます。ロード様。今日はどこに行きましょうか？」
「そうですか…。ですが！もし、気分がお悪くなったら遠慮せず言ってくださいね？」
心配そうにそう言われ、マリアベルは頑張って微笑みを作り「はい！」と返事を返した。
「では…。今日はサルーナ国の町を見せていただいてもよろしいで

すか？」
「それではご朝食後。町に降りましょう 」
二人は午後の予定を決めると、その後すぐマリアベルを迎えに来たカナリアとルルベルと共に広間に向かい朝食を取りに行った。
マリアベルはカナリアやロード達と楽しそうに会話していたが、心の中では夢のことでいっぱいだった。
――――姉様達に相談…してみたほうがいいのかな…――――
そこで、マリアベルは夜カナリアの部屋に行きルルベルも呼んで夢の事を話してみようと考えついたのだった。
それまでは、ロードと楽しく一日を過ごそうと決めた。

朝食を終えた後、マリアベルとロードは町に降りた。
「おぅ！月の姫様！ま～た遊びに来たのかい！」
魚屋のいかつそうで笑顔の素晴らしい男性がマリアベルにそう叫ぶと、他の店に立つ店番達もマリアベルの方に視線を向けた。
「姫様。甘くて美味しい林檎が手に入ったんですよ。１個どうぞ。お代はいりませんからね 」
今度は果物屋の心優しそうな見た目、４０代前半だろう女性がそう言いながらマリアベルに林檎を渡してきた。
「ありがとう。とても綺麗な色ね 」
「そうだろう、そうだろう。さっき入ったばかりだからね！その林檎を食べる人は今日は姫様が最初の人だよ！…おや？姫様お客人かい？これはいけないねぇ。どうぞ！あんたにもこれをあげようじゃないか！」
そう言うと、女性はマリアベルの横にいるロードに林檎を投げ渡してくれた。
「ありがとうございます 」
ロードが微笑みながらそう言うと、女性は虚をついたように目を見開き頬を染めてしまった。
「あらやだよぉ。良く見たらいい男じゃないか！なんだい？姫様、

もしかして…これかい？これ。」
そう言うと、女性はニヤニヤ顔で小指を立てて見せた。
「もう！女将さん！違うわよ！」
マリアベルが頬を染め、そう否定すると今度は町の子どもたちがマリアベルの元までやってきた。
「ひめさま～！またおうたきかせて～？わたし、ひめさまのおうただーいすき！！」
「なんだ、姫様ま～たきたのかよー！仕方ねぇな～。俺らの遊びにいれてやんよ！」
「わぁ～…。姫さま～こっちのかっこいい人だぁれ～？」
一人はマリアベルのドレスの裾を掴み、町の中央にある噴水広場まで促そうとし、一人は頭の後ろに両手を当て頬には怪我をしたのかカットバンをつけたまま「イヒヒ」と笑っている。少し悪戯好きっぽそうな男の子だ。
そして、もう一人の、この中で一番年上で見た目１０代前半と思える少女はロードを見つめポーッと頬を染めていた。
「こちらはロード様。お客様だから、皆失礼のないようによろしくね 」
マリアベルがそう言うと、子ども達は声を揃えて「はーい！！」と元気よく答えてくれた。
一人、まだ一番年下と思える少女がマリアベルの裾をつかんだまま話しかけてきた。
「ひめさまぁ…おうた…」
マリアベルは裾を掴んでいる、小さな手に自分のそれを重ねしゃがみこみ微笑みながら少女に話しかけた。
「えぇ。わかったわ。後で噴水のところまで行くわね 」
マリアベルがそう伝えると、少女は裾から手を放し「わーい！！ひめさま、待ってるねー！」と言いながら噴水広場の方までかけていってしまった。
マリアベルはそれを見つめていると、ゆっくりと腰を上げた。

「この町の人々はとても仲も良く幸せそうですね 」
マリアベルの隣でロードがそう呟いた。
「えぇ…。１０歳になってからはほぼ毎日のように町に降りては、子ども達と遊んでいるのです。たまに、ああやって歌を歌ってほしいと言われると、町の中央にある噴水広場で歌を披露するんです 」
「なるほど、それで月の姫という名をつけられたのですね 」
普段、城の中で大切に育てられるはずの末姫である、マリアベル。そんなマリアベルの美しい歌姫を金のない町の人が聞くことなどできるはずがない。だからこそ、ロードは不思議に思っていたのだ。どうして、彼女が『町の人』から月の姫と呼ばれているのかを。だが、それも、今ようやくわかった。
「月の姫… 」
そう呟き、表情から元気がなくなってしまったマリアベルを見て、心配したロードはマリアベルの顔を覗きこんだ。
「どうかなさいましたか？」
我にかえったマリアベルは視線を戻し、ロードの視線に気付きアタフタと答えた。
「だ、大丈夫です！さ、さぁ！まいりましょう？皆広場で待ってます 」
そう言うと、マリアベルはロードの手を取り噴水広場の方まで連れて行った。

「お！月の姫様がいらっしゃったぞ！」
「姫さまー！こっちこっち！！」
マリアベルとロードが広場に到着すると、そこにはたくさんの人で賑わっていた。先ほどの少女がマリアベルの傍までやってくると、手を繋ぎ噴水のあるところまで連れて行った。
「さぁ兄ちゃん！あんたはお客様なんだから一番傍で見てくれよ！」
痩せた気の良さそうな青年に背を押されるようにしてロードはマリアベルに一番近い場所まで連れていかれ、今度は両肩に手を置かれ、

その場で座るように促された。
「今日はどんな曲が良い??またキラキラ星?」
マリアベルは手をつないでいる小さな少女に問いかけた。
「ん～っとねぇ…。姫さまの好きなお歌がいい!!」
好きな歌というと1曲しか思いつかなかった。『女神の悲愛』だけだ。
「わかったわ。じゃあ歌うわね 」
マリアベルがそう言うと、少女は自分の母親らしき女性の元まで行き女性の膝に座りながら目を輝かせてマリアベルを見つめていた。
周りからはヒュー!!っと口笛を吹く人がいたが、マリアベルが歌う姿勢を作ると、いっきに当たりは静まり返った。
「心～のこ～えを～あなた～にき～かせ～」
マリアベルは歌いながらに思った。
――――私は…私はこの町の人たちが好き…姉様や父様、母様が大好き、ロード様が…――――――――――
そこでやっと自分の気持ちに気付いたマリアベルは涙を流してしまった。マリアベルは涙を流したまま目を瞑り歌い続けた。
「あぁ…月の姫様…」
マリアベルを見ている観客の中、一番前で椅子に腰かけ歌に聞き入っている老人がそう呟いた。瞳にはいっぱいの涙をためていた。
マリアベルが歌っている最中、後ろの噴水が決められた時間がきたのか上に吹き出し水の傘を作った。その水の雫が下に落ちる様を見ていると、マリアベルの体が青銀色に輝いているように見えていた。歌を聞き入っている者の中には両手を胸の前で組み、目を閉じ祈っている者までいた。
ロードはそんなマリアベルを見つめていた。愛おしそうに。
――――私は、彼女を愛している。5年前、初めて会ったあの日から。だからミルヴィン王とある約束をした『もし、マリアベルがあなたを好きになるようでしたら結婚を認めましょう』と――――
ロードはマリアベルをサンメリア国の妃であり、自分の妻にしたい

と考えていた。やっと会えた小さな女神、やっと出逢えた初恋の人。
もう、手放したくないと強く願っていた。

## プロポーズ

歌い終わり、ゆっくりと瞳を開けると突然歓声が鳴り響いた。
「わぁ！！！姫様ーー！！」
「月の姫様こっち向いてぇ！！」
「月の姫…いや、月の女神様…どうかご慈悲を…」
嬉しそうにアンコールをかけている者、絵画家なのか絵を書いている者、椅子に腰かけたまま胸の前で両手を組み泣きながら祈りを捧げているものがいた。
マリアベルは涙を流しながらそんな町の民を見つめていた。
――――私は…皆のために…月に登ろう…そうすることで皆が…愛する人たちが幸せになるのなら…――――――
マリアベルはそう決心したのだった…。
「皆。ありがとう。皆、この国を守ってね？お父様に優しくしてあげてね」
「何をおっしゃいます！姫様！私たちにとって陛下やお后様、姫様方はこの国の宝ですよ！」
マリアベルの言葉に一人の青年が答えた。すると、青年に続いてまた一人、また一人と言葉を言うものは増えて言った。
マリアベルは民のその言葉を聞くとまた泣き出してしまいそうになってしまった。
「マリア」
そんな時、突然名を呼ばれそちらに視線を送るとそこにはマリアベルに向かって手を差し伸べているロードの姿があった。
マリアベルはゆっくりとその手に自分のそれを重ね、その場を走って後にしたのだった。
しばらくは元気な子ども達が二人についてきて一緒に走っていたが。疲れてしまったのか、途中から姿が見えなくなってしまっていた。
「はぁはぁはぁはぁ……」

「はぁはぁはぁはぁ……っ…あはははは！！」
「ふ…ふふふ…」
二人は高台のある場所でやっと走るのを止め顔を見合わせると、突然笑い出したのだった。
そしてロードは高台にある手すりの傍に行き、今にも沈もうとしている夕日を見つめていた。マリアベルもロードと並ぶように横に立ち手すりに手をあて夕日を見つめた。
高台にはとても涼しい風が吹いていた。
夕日を見つめていたロードの視界に青銀色の糸のような物が入り、その糸の流れているほうに視線を向けると、そこには風に髪をなびかせ、それを手で制している月の姫が自分の隣に立っていた。だが、ロードが見て驚いたのはその姿ではなく一瞬、本当にほんの一瞬だったがマリアベルの背から白く大きく美しい翼が生えていたように見えてしまったのだ。そう、それはまるで天界に住まうと言われている天使のような…。
ロードはその翼を目にするとサッとマリアベルの手首を掴んだ。すると、それに驚いたマリアベルが驚いた表情を作りロードの方に視線を送る。
「ロード様？どうなさいました？」
そう聞かれ、ロードが我にかえるとマリアベルの背にあったはずの翼は元々なかったかのように消えてなくなっていた。
「え…いぇ…」
そう言うとロードはマリアベルの手首からそっと自分のそれを放した。
――――――なんだ今のは…？一瞬姫が飛んで天に消えて行ってしまうかと思った…――――――
「マリア」
そこでロードは何かを決意したかのようにマリアベルの方に強い視線を送る。
「はい…？」

マリアベルもロードの強い眼差しを見ると、何か大事な話をするのだと察し真剣な表情をロードに向けた。
「あなたに…お話したいことがございます」
「お話？」
「はい。私は昔、父上に連れられて町に降りた事がございます。町の偵察もかねたものだったので私も父上も平民と同じ服装をしておりました。私はそのとき１１歳で生まれて初めての町でした。周りにある物全てが初めて見るものばかりで、そのおかげで私は迷子になってしまいました」
話し出したロードをマリアベルは優しい、けれど瞳はとても真剣な物で聞いていてくれた。
「困った私は、町の中で父上を探しても更に迷子になってしまうだけだと思い町の外にある泉に行きました。そこに行けばいつか町を探しても私がいないことに気がついた父上が来てくれると思ったからでした。生まれて初めての世界を目にして私は寂しく泣きそうになってしまいました。いえ、涙は…少しは流れていましたね…。私はそんな顔を民や父上には見せられないと考え、傍にあった泉で顔を洗おうと近づきました。ところが、泉に近づくととても美しい歌声が聞こえてきたのです」
「歌声？」
マリアベルはそこでやっと返事を返した。
「えぇ。幼いながらも一生懸命さが伝わるとても元気づけられる歌声でした。大きくなってから気付きましたが、あの時のあの歌の名前は『女神の悲愛』でした。私はその歌声を聞いた途端悲しみを忘れ深い眠りについてしまいました。目が覚めると城の寝室にいたので父上にあの時歌を歌っていた少女の話を聞きましたが、父上が来たときは私意外誰もいなかったそうです。父上は夢を見たのではと言いました。その理由は、その少女の姿がとても人間とは思えないほど美しいものだったからです。瞳の色はわかりませんでしたが、青銀色の髪をした年は１０歳９歳ほどの少女…」

ロードのその話を聞いていると、マリアベルは驚いたように目を見開き両手の指先で口を塞ぐようにして話を聞き入っていた。そして、ロードはさきほどの強い眼差しを止め目の前にいる愛しい物を優しい眼差しで見つめていた。

「それから私は毎日のように町中を探し回りました。あのように歌声の美しい少女なら我が国の子どもに違いないと考えたからです。ですが、どこを探しても少女は見つかりませんでした…。そして、あれから5年が過ぎ私の誕生式典にミルヴィン王がいらせられました。私はミルヴィン王にお話したのです5年前の事を、するとミルヴィン王はマリアベル姫の事を話されました。私は貴方に希望を持って会いに行こうと決めました…」

マリアベルはそこでやっとわかった。王が何故カナリアでなく末姫である自分を王子の案内役に指名したのかを。

「そのとき王はある約束をしてくださいました」

「約束?」

マリアベルの問いにロードは頷いて答えた。

「『もし、あなた様が探している忘れられない少女がマリアベルでしたら。サンメリア国の妃にしたいという殿下の考え尊重いたしましょう。ですが、マリアベルは私の大切な末姫。あの子が不幸になるところを私は見たくはないのです。なので、もしあの子があなた様を愛したというのなら…結婚をお許しいたしましょう。』と」

「父様…」

「そして…」

そこで話を区切ったロードにマリアベルは視線を送ると、突然ロードは床に片膝を付き胸に片手を当てマリアベルのほうに視線を送る態勢になり言った。

「ついに…ついに見つけたのです。あの時、歌っているあなたから勇気と、安心感をいただいた時から…あなたのことを愛しておりました。この5年間ずっと、あなたを探し続けておりました。私と…結婚してくださいませんか…?」

「…っつ！？」
マリアベルは顔を両手のひらで覆い泣いている顔を隠した。
――――『はい。私もあなたを愛しております。』そう言いたい…言いたいけれどできない…！だって私は…――――――
「あ…」
マリアベルが返事を言おうとすると、ロードの手が唇に触れ言葉を留めた。
「お返事は今ではなくても構いません…。私の気持ちを知って頂けたら幸いです。いつまででも待ちましょう」
そう言うとロードはマリアベルに手を差し出した。マリアベルは涙を流したままロードの手にそれを重ね握った。
そして二人は手をつないだまま城に向かって歩きだしたのだった…。

「マ～リーアーーーー！！！！！」
バターン！！！！
マリアベルとロードが城に帰ると、まずマリアベルを見て驚いたのはマリアベル付きの次女達だった。何故驚いたのかというと、マリアベルは涙は止まっていたが、どう見ても泣いた後の瞳をしていたからだ。そんなマリアベルを心配した次女の一人がカナリアの元まで赴き、その旨を伝えたのだ。それを聞いたカナリアは突然次女を置いて走り出しまずルルベルの自室へ行き何も言わず腕を掴みマリアベルの自室へと走り出したのだ。

そして今に至る。
突然の姉達の訪問に驚いたマリアベルは椅子に腰かけたまま驚いた表情で姉達の方に視線を向けていた。そんなマリアベルの瞳を見るとカナリアは傍まで行き叫ぶようにして言った。
「い…いやぁぁぁ！！！私の…私の可愛いマリアの瞳が！！！」
そこからは何故かワナワナとしながら続きを話さないカナリアの変

わりにルルベルがマリアベルの両頬にそっと手を添え言った。
「 曇ってる… 」
ルルベルの言葉を聞くなりマリアベルは次女から渡された氷と水の入った袋を両目に急いで当てた。
そんなマリアベルの動作だけでカナリアは気を失うように後ろに倒れふしてしまった。
「 あぁ！！カナリア姫様！？ 」
そこにやっとのことでカナリアに追いついた、カナリア付きの次女が倒れるカナリアを腕の中に収めた。ルルベルはそんなカナリアの心配などせず、真剣な眼差しでマリアベルにまた話かけた。
「 何があった？ 」
あまり話すのが好きではないルルベルがこんなに話しているのにも驚きだが、その真剣な眼差しにマリアベルはグっと俯いてしまった。何も話そうとしないマリアベルにルルベルは瞳を細め少し怒っているような声音でもう一度言葉を口から吐き出した。
「 ロード殿下か…？ 」
そう言われた途端、マリアベルの頬は真っ赤ないちごのような色になってしまった。それと同時に止まっていたはずの涙も流れてきてしまった。そんなマリアベルを見つめていたルルベルは踵を返し後ろに既に控えていたルルベル付きの次女に命令した。
「 私の剣を持て 」
ルルベルは普段話すのをあまり好まない見た目はとても優しそうな姫だが、それは表の姿だった。本当のルルベルはサルーナ国で一番の「緑の騎士姫」という名で呼ばれるほどの剣技の才を持つ人だ。おそらく、どこの国に言ってもルルベルに叶う相手はいないだろう。ルルベルの言葉を聞くと、マリアベルは大急ぎで椅子から腰を上げルルベルの袖を掴んだ。
「 お、おやめください！ルルベルお姉様！ 」
そうルルベルを止めるが、ルルベル本人は今にも誰かを殺してしまいそうな気を放っていた。

「　そうよ。おやめなさいルル　」
そこでやっと目を覚ましたカナリアがルルベルに声をかけた。
自分より上の者でもある姉、カナリアにそう言われてしまうとルルベルは従うしかなくなってしまう。「ふぅ…」とため息を吐くとマリアベルの部屋にあるソファにゆっくりと腰かけた。
それに続くようにカナリアもソファに腰をかけさきほどまで座っていたマリアベルと向かい合わせの格好になる。
「　…それで。泣いている理由を私たちに話せる？　」
カナリアが腰かけた後。マリアベルも元座っていた椅子に腰を下ろした。それを見計らっていたかのようにカナリアが話し出した。
カナリアからの言葉を聞くなり、マリアベルは二人の背後で付き従い立っている次女に視線を向けると、それに気付いたカナリアが次女達に声をかけた。
「　私たちはしばらくこの部屋にいるから。あなたたちは外に出ていてちょうだい　」
カナリアがそう告げると次女は達はお互い顔を見合わせ不安そうに一礼をし、部屋を出ていった。次女たちも皆。マリアベルの事を心配していたようだ。
次女達が出ていくところを目で見送ったカナリアは、戸が締まるとマリアベルの方に向き直った。
マリアベルは一つ深呼吸をすると、夢で見た物聞いた話、ロードから言われた言葉を全て姉達に話した。

## 信頼する者

「マリアが…『次の月の女神』…ですって…」
カナリアは体ごと前に乗り出すような態勢でマリアベルにもう一度聞き返した。
「はい。女神様はそうおっしゃっていました」
すると、今まで口を開く事のなかったルルベルが突然椅子から腰を上げ立ち上がるとゆっくりと歩きマリアベルの横まで行くと、何も言わずマリアベルの首に腕を回し頭に手を置いてマリアベルを抱きしめた。
「行くことない。私がこの国を守る」
そうゆっくりと告げた。するとカナリアも負けじと言葉を口にする。
「そうよ。この国は私達や父上、母上、王族が守らなければいけないのだから。末姫であるあなたが一人で体をはって守る必要ないのよ。だから空の上なんか行くことないわ」
「…はい…」
マリアベルは涙を流しながらルルベルの腕にしがみついた。
「でも、」
そこでまた言葉を口にしたカナリアの方をマリアベルとルルベルは見つめた。
「ロード様のプロポーズは許しがたいわね…」
そう言うカナリアの表情はとても恐ろしいことになっていた。
――――――でも、ごめんなさい。姉様方。私、もう決めたのです。
――――――
するとそこで今まで黙っていたルルベルがマリアベルを上から眺めるようにして喋り出した。
「マリア。プレゼント何が良い？」
そう聞かれ、マリアベルはあることを思い出した。
――――――そうだ。２日後は…――――――

そこでカナリアが喋り出した。
「あらやだ。そうだったわね。２日後はマリアの１６歳の誕生日。マリア、何か欲しいものはある？」
――――――２日後。女神様が迎えにいらっしゃる…――――――
マリアベルは女神様に言われた言葉は話したが、最後に言われた言葉『１６歳の誕生日の夜に迎えに行く』というのだけ姉達に話してないのであった。
「お祝いしてくださるだけで嬉しいです」
そう微笑みながらに言い返したが、あっさりと姉達に言い返しされてしまった。
「「だめ！」よ！」
「…？？」
「１６歳と言ったら成人の儀よ！？プレゼントもそれ相応ものではないといけないわ！」
ルルベルはカナリアの言葉に頷いていた。
「でも、本当に。父様、母様、姉様方にお祝いしていただけるだけで嬉しいんです」
マリアベルが微笑みながらそう伝えるとカナリアとルルベルはお互いを見合い渋々答えた。
「わかったわ…。あ！じゃあ、プレゼントの代わりに色々な国から色々な人々に来ていただいてお祝いしていただきましょう！？」
「はい！」
マリアベルは今度のカナリアの案には笑顔で返事を返した。
『あ、それと！』そこでカナリアはあることを思い出したように話を変えた。
「マリアベル。誕生式典のエスコート役は私達がやってもいいわよね？この間はロード殿下にお譲りしたけれど、今度はいいわよね？」
カナリアにそう問いかけられ、先ほどのロードの事を口に出した時のカナリアの表情を思い出してしまいマリアベルの心の蔵がドキリ

となった。
「は、はい。構いません。まだお約束もしておりませんし」
その後カナリア・ルルベル・マリアベルは楽しい会話をしながら誕生式典ではどの国の人を招待しようかなどの話をしていた。

その日の夜、ミルヴィン・アリア・カナリア・ルルベル・マリアベルが広間にて食事をしているとカナリアが口を開いた。
「お父様、2日後の誕生式典にはどれくらいのお客様をお呼びするのですか？」
「そうだな。パーティーの時は各国の王族などをお呼びしなければなるまい。日本などは王族はいないので、なんといったかな？総理大臣と言ったか？あれが政治的な代表のようだからその方をお呼びしようと考えている」
ミルヴィンがそう言うと話を聞いていたロードが割って入って質問してきた。
「2日後何かあるのですか？」
そこでカナリアが今でも呪い殺しそうな視線を一瞬ロードに向け吐き捨てた。
「ご存知ありませんか？2日後はマリアベルの誕生日なのです。なので昼は城の最上階のベランダから城の敷地に集まった民に手を振り、夜はパーティーがあるんです」
そんなカナリアの視線にもめげずロードはマリアベルに視線を移し声をかけた。
「2日後成人なさるのですか。おめでとうございます」
誰にでもわかるような柔らかく優しい視線を向けられたままそう言われ、マリアベルは頬を薄く染めてその言葉に答えた。
「は、はい。ありがとうございます…」
そんな二人の様子を見ていたミルヴィンは何かに気付いたかのように頷いていた。
だが、ミルヴィンと違い二人の様子に苦々しい表情をしている者が

いた。カナリアだった。
そこで思い出したかのようにロードが「あっ」と声を上げた。
「　誕生式典があるということはまたマリアベル姫は遅れてご登場なさるのですよね？と、言うことはエスコート役はまだお決まりではありませんか？　」
ロードがそう言うと、さっきまで頬を真っ赤に染め上げていたマリアベルの表情が悲しみの表情に変わった。
「　も、申し訳ありません…。姉様方とお約束してしまいまして…　」
「　そうですか…。仕方ありませんね。最近、マリア姫様を独占しすぎてしまっていましたから　」
その後も誕生式典の話をしながら食事をし、食事を終えると自室に戻り眠る準備をしていた。
入浴を終え、寝着に着替え鏡台の前にある椅子に座り次女がマリアベルの髪をすいていると次女が声をかけてきた。
「　姫様。あの…　」
モジモジとした次女に最初疑問をもったがすぐに何を言いたいのかがわかりマリアベルの方から声をかけた。
「　心配させちゃってごめんね。姉様方にご相談にのってもらってもう大丈夫よ。ありがとう　」
そう言いながらいつもどおりを笑顔を向けると、次女も安心したのか胸を撫で下ろし中断していた髪すきを大急ぎで再開させてくれた。
その後、髪をすきおわると次女はそのまま「おやすみなさいませ」と言い残し部屋を出ていった。
マリアベルは椅子に腰かけたまま鏡を見つめていた。
「　１６歳の誕生日の夜…　」
そう呟いた途端、突然鏡が光だした。マリアベルは一瞬目を閉じたが、すぐに開き鏡に写っている人を見て驚いた。
先程までマリアベルが写っていたそこには、マリアベルと同じ髪と瞳の色をした夢で見たことのある女性が写っていた。

「め…がみ…様？　」
女神は笑顔で頷きマリアベルに話かけた。
「マリア。返事はまだ聞きませんので安心してちょうだい。あなたの疑問に答えるため、そしてあなたにお願いがあって今日はやってきたの。夢だと、『夢』だから現実ではありえないと考えてしまいそうだったから…　」
「そのような事考えません！　」
マリアベルが興奮しながらそう叫ぶと、女神は唇に人差し指を当てた。その動作を見て、今がどのような状況なのかを思い出し、マリアベルは口元を両手で被った。
「あなた、心配しているわね。「１６歳の夜、自分が突然消えたら皆は心配しないだろうか」と、そして「自分が女神になった後女神の血は途絶えるけれど私の次の月の女神はどうなるんだろう」と
」
心の奥底で考えていた言葉を言い当てられマリアベルは目を見開いたまま首を下に降った。
「っつ！？　」
「心配しなくてもいいわ。あなたが天に来たときはあなたは神になったのだからあなたが地上にいたときあなたと関わった者達の記憶からあなたは抹消されることになるわ　」
そこで何故か悲しそうな表情を作って話を切った女神をマリアベルは心配そうに見つめた。そんなマリアベルの視線に気付いたのか女神は一瞬笑みを作り話を続けた。
「あなたにお願いしたいことがあると言ったわね？それはあなたが心配していたもう一つの方に当てはまるのよ。マリアベル　」
そこで女神に優しく問われ、マリアベルは緊張しながらその声に答えた。
「は、はい…　」
「あなた…好きな人ができたわね？　」
マリアベルのロードへの気持ちに女神は気付いていたのかズバリと

言い当て、マリアベルはすぐ頭を下げた。
「も、申し訳ありません！」
「謝らなくてもいいのよ。恋をしてはいけないとは言ってないわ。結ばれてはいけないと言ったのよ。それでね、１６歳の誕生日の夜、もし貴方が私と共に天界に来てくれると言うのならやってほしいことがあるの」
「やってほしいこと？」
「えぇ。女神はたった一つの大きな魔法を神から使っても良いと許されているの。それは、自分のお腹の中に生まれるはずの未来の子を連れてきて信頼できる女性のお腹へと移し、その女性と自分が愛した男を一緒になるよう仕向けること…」
「…？ど、どういうことですか？」
「簡単に言うと、あなたが女神の道を選ばなかった時の未来に行きそのとき生まれるはずの子の魂をコピーし連れてくる…ということよ。信頼できる女性はいる？」
そう問われ、マリアベルは考えた。
「…姉様方…カナリア姉様…」
マリアベルの口からボソッと出た言葉を女神は聞き逃さなかった。
「カナリア…あなたのこの国の長女ね。そうね。あなたの姉でもあるし王女でもあるからいいわ。でも、あなたがあの方を諦めなければいけないのに変わりはないわ。そのかわりカナリアの子ではなくあなたの子がカナリアの中には入り生まれて来ることになるから生まれてくる子はカナリアとロード王子のものではなくあなたとロード王子の子よ…。そう、私がしたように…」
そこで女神は昔を思い出したのか一粒の涙を流したがすぐに笑顔を作りマリアベルの返事を待たずに答えた。
「じゃ、じゃぁ！１６歳の誕生日の夜また来るわ。考えておいてちょうだい…。無理…しなくてもいいのよ…。地上で愛する人といたいと考えるのは人として当然なことだもの…。そ、それじゃあ私は行きますね」

「あ！女神様！！」
マリアベルが呼んだ時には既に女神は鏡の中にはいなくなっていた。
そのかわりにマリアベルの叫び声を悲鳴と勘違いしたのか次女が誰か男を連れてきたのだろう。乱暴に戸をノックされた。
「姫様！？何かございましたか！？」
そこでマリアベルは一度深呼吸をすると、ゆっくりと戸に向かって行き開けると次女と数人の男に言った。
「私は大丈夫よ。ちょっと変わった夢を見てしまったの。心配させてごめんなさいね」
笑顔でそう言うマリアベルに安心したのか次女と男達は「そうでしたか…夜分遅くに申し訳ありませんでした…何かありましたら、すぐにお呼び出しくださいね。」と言い残し部屋を後にした。
マリアベルは戸を閉めると、戸にもたれかかり溜息を付きそのまま寝室の戸を開け。そのまま寝台の上に倒れるようにして眠りについた。

## 予知夢

「　ここは…　」
マリアベルはどこかの森の中にいた。日の光がさし、緑の素晴らしい森だ。
近くから活気あふれる歌が聞こえてくる。サンメリア国の近くなのだろうか。そうマリアベルが考えていると、どこかで泣き声が聞こえてきた。
「　エーン！！お母様ー！！お父様ー！！　」
マリアベルは泣き声のする方に歩み寄って行った。声のする場所に立つと、マリアベルは目を見開いて驚いた。
そこに立っていたのは髪がマリアベルと同じ青銀色で瞳も髪と同じ色の年は１０歳か９歳ほどの少女だったからだ。
「　わ、わたし…？　」
マリアベルはわれに返ると。少女の傍まで歩み寄り話かけた。
「　ねぇ。どうしたの？迷子？　」
だが、少女はずっと泣き続けている。
「　泣いたままじゃわからないわ…。ねぇ　」
そこで少女の肩に手を添えようとすると、スルッと通り抜けてしまった。
「　え？　」
「　アリア？ここにいたの？　」
そこで突然、マリアベルの背後からいつも聞いている声が聞こえてきた。振り向いてみると、そこにはいつもとはまた違ったイメージのドレスを身にまとったカナリアがそこに立っていた。
「　お母様ーー！！　」
すると、さきほどまで泣いていたはずの少女が走り出しカナリアに抱きついた。カナリアはしゃがみこみアリアという名の少女の頭を優しく撫でてあげていた。

このとき、マリアベルはやっと今自分が立っている場所がどこなのかがわかった。そう自覚したときだった！
「カナリア。アリアは見つかった？」
カナリアの背後から愛おしくてたまらない人の声が聞こえてきたので、マリアベルはそちらを見つめてしまった。
「お父様！！」
そう言うとカナリアに頭を撫でられていたアリアはすぐさまロードの元まで駆けて行った。するとロードはアリアを抱き上げてしまった。
「すまなかった、アリア。目を放してしまったばかりに寂しい思いをさせて」
ロードは今にも泣きそうな悲しい表情でアリアにそう告げると、アリアは泣いていたのが嘘のようにロードに言った。
「大丈夫よ！お母様がよくお話してくださる、今の月の女神様のように私も強くなるのだから！」
『今の月の女神』という言葉を聞くと、マリアベルは心が傷んだ。このアリアという少女は本当なら自分とロードとの間の子、それが今見ている未来の夢では自分は既に天に上がり月の女神となり生まれるはずの魂を信頼できる人であり、大好きな大切な姉カナリアに託し、本人達の記憶から自分が消えてしまっているのだ。
だが、少しマリアベルはアリアの言葉に疑問を抱いた。彼女は今、確かに『今の月の女神様の話』と言ったのだ。カナリアには自分がカナリアの妹だった記憶がないはずだ。と、言うことは自分が話した次の月の女神だという話も記憶から抹消されているはずなのだ。なので、『今の』という言葉が付くのに疑問を抱いてしまった。
すると、突然視界が歪み始め森にいたはずが見たこともない部屋にマリアベルはいた。
「ここは…？」
当たりを見回すと、マリアベルの立っている場所から少し離れた場所にある寝台にアリアが寝転がり、カナリアが何やら話をしている

のが見えたのでマリアベルは二人に近寄った。近づくに連れて話の内容が聞こえてきた。
「その子はとても歌が上手でね。お城の中にある一角で毎日のように歌っていたの。髪も瞳もアリアと同じ色のその子はとても頑張り屋でね？ダンスも上手だったわ」
カナリアが口にしている話にでてきてる『その子』というのが自分だということにマリアベルが気付くのにはあまり時間はかからなかった。
「ねぇ。お母様？その人は今どこにいるの？私、お会いしたいわ」
アリアが眠気眼でそう告げると、カナリアは薄く微笑み頭を撫でてあげながら告げた。
「その子は、今大切なお仕事をしに遠くまで行ってしまっているの。いつか…いつか、帰ってきてくれたのなら…きっと…きっと…」
そこで涙を流してしまったカナリアにアリアは眠気眼を見開き寝台から起き上がり、カナリアの瞳に手を当てた。
「母様…？どうなさったの…？どこか痛いの？大丈夫よ。大丈夫」
アリアは最初片手はカナリアの瞳に、もう片方の手はカナリアの頭を撫でるようにしていたがカナリアの涙が止まらないことを知り寝台の上で膝立ちカナリアの頭を包むようにして抱きしめた。
カナリアはそんなアリアの行動に安心したのか、アリアを放し涙を拭い寝台の中に戻りように促した。
「大丈夫よ。大丈夫。きっと会えるわ」
そんな二人の様子を黙って見つめていたマリアベルは知らずうちに涙を流してしまっていた。
涙を拭っているとまた視界が歪み始め、マリアベルは「今度はどこに？」と次に現れる世界を待った。
すると、今度の光景はさっきとは違い真っ暗な世界だった。

「　真っ暗…ここはどこ…？　」
当たりを見渡すとどうやらここはサルーナ国にある町なのだと言う事を理解することができた。だが、何故か人の気配がとても少なくどの家も電気を付けていなかった。
「　今は夜中なのかしら？」と思ったが、広間に置かれている大時計を見てみるとまだ眠りにつく時間ではなかった。そして、もう一つマリアベルが気になったのは空だった。空に必ずあるはずの物がどこを探しても見当たらないのだ。
そう、月がどこにもなかった。
――――――――さきほどまで見ていたのが私が天に上がってからの未来なら…ここはもしかして私が地上を選んだ未来…？――――――
と、そこで突然足元からボコボコという不快な音が聞こえてきて、マリアベルは足元を見るとそこには地面からまるで水が沸き上がるように何か黒い液体のような物がでてきていた。
君が悪くなりその場から数歩後ろに下がると、マリアベルの立っていた場所足元から湧き上がっていた液体が段々形を作っていることに気付いた。マリアベルはその姿形を見た事があった。そう、前に夢の中で女神様が見せてくれた自分が女神にならず地上に残ってからの地上の様子を見たときに地上にいた無魔だった。
姿を表した無魔はそれだけではなかった良く見ると、マリアベルの周囲には無魔が何十匹も姿を表し町に向かって歩いていた。
「　ヒック！ウイ～～ック！　」
そこで突然人の声が聞こえ、マリアベルがそちらに視線を送ると、そこには仕事帰りにどこかでお酒でも飲んだのか酔っ払っている男がフラフラと歩いていた。どうやら無魔達はその男に向かって歩いているようだ。
「　ダ…ダメ…やめ…　」
マリアベルがそう叫ぼうとした途端！シャアアアアア！！！と、無魔達が声をあげながらその男に襲いかかった。

「な、なんだ！？う、うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
「い、嫌ぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
男が叫ぶのとマリアベルが叫ぶのはほぼ同時だった。マリアベルが叫ぶと途端に視界が明るくなり、マリアベルは目を覚ましていた。
「姫様！？姫様！大丈夫ですか！？どうかなさったのですか！？」
どうやらマリアベルは夢の中だけではなく現実で叫んでしまっていたようで叫び声を聞いた警備中の兵が次女と一緒にマリアベルの部屋までやってきてくれていた。
外は既に薄明るい空の色をしていた。いつもよりかは早めに起きてしまったようだ。
「姫様…！大丈夫ですか？？？」
マリアベルは額に手を当て次女の手を借りながらベッドから体を起こし周りを見ると次女を呼びに行ってくれたのであろう兵がどうすればいいのかと辺をキョロキョロと見ていた。
「大丈夫よ…。ちょっとおかしな夢を見てしまったの…」
マリアベルが二人を落ち着かせようとそう言うと、兵はやっと一息ついてから「それでは姫様。失礼いたします。」とマリアベルの安静を確認してから寝室を出ていった。
次女も兵と同じく一息つくと「紅茶を入れてまいりますのでお待ちください。」と言い寝室を出ていった。
「はぁ…」
マリアベルはやっと一人になれたというように大きく息を吐いた。
――――――さきほどまで見ていた物が…――――――
マリアベルはさきほどまで見ていた夢の内容を思い出すと胸に手を当て強く目を瞑り俯いた。
――――――私が…私が地上を選んでしまうということは無魔にこの町を襲うのを許す事。そして、私が天を選べば町の皆が幸せになれる。そして私とロード様との間に生まれずはずの子が姉様によって生み出され、ロード様も姉様も幸せになれる…そう、私が一人諦め

ればー…――――――――
マリアベルは再び決意の気持ちを胸に秘めた。
――――――そうなれば、明日の式典の夜まで思い出を作らなきゃ！――――――――
そこでまたも部屋の戸をノックされ、返事を返すとトレイを持った次女が寝室へ入ってきた。
「お待たせいたしました。紅茶をお持ちいたしました。姫様、本当になんともございませんか？もし、ご無理をされているのでしたら朝食は部屋で取れるようにいたしますが…」
紅茶をカップに注ぐ準備をしていた手を一旦止め次女がそう心配そうな表情でマリアベルに話かけてきた。
「そうね…。じゃあそうするわ。用意をお願いできる？」
マリアベルは心配そうにしている次女の要望どおりにすることにした。次女は要望を聞いてもらえてうれしかったのかうれしそうな表情で元気に返事を返し、マリアベルが紅茶を飲み終わるとそれを持って部屋を出て行った。
その後、次女の持ってきた朝食をマリアベルは持ってきてくれた次女にもお裾分けしながら楽しく食べた。
朝食を終えまたも次女に紅茶を注いでもらい窓際に椅子を移動させ腰かけながら窓から見れる国の風景を堪能していると
コンコン
と、部屋の戸を誰かが叩いた。
次女が開けようか迷いながらマリアベルの指示を待っているので、マリアベルは次女にアイコンタクトを送り戸を開けるように指示をした。次女はゆっくりと戸に歩み寄り戸の向こう側にいる人物を確かめると戸を閉めマリアベルの方を向き直った。
「ロード様がいらっしゃいました。どうなさいますか？」
「お通しして頂戴」
マリアベルからそう言われると次女は嬉しそうに戸をあけ、向こう側にいるはずのロードを部屋へ招き入れた。

「マリア。おはよう」
「おはようございます。ロード様」
ロードは部屋に入ると長椅子に腰かけた。次女が紅茶を持ってくるとそれを手に取り飲んだ。
紅茶を一通り飲むとロードは話をしだした。
「マリア。今日は聞きたいことがあってきたんだ…」
そこでマリアベルの心が一瞬ドキンとなった。それは先日ロードに言われた事が原因だった。『愛しています。結婚してください』。
そう、彼はマリアベルに求婚してきたのだ。
返事はいつでもいいと言っていたので明日何も言わず記憶を消し天に昇ろうと考えていたので何も考えてはいなかったが、やはり返事が気になってしまったのかもしれないとマリアベルは緊張しながらロードに答えた。
「聞きたい事？それは…？」
ロードはしばらく頬を染めたまま宙を仰いでいたが決心したかのように強い眼差しをマリアベルに向かって見せた。その強い眼差しを見て、マリアベルの心がまたもやドキンとなってしまった。
「た…」
「…っつ！！」
マリアベルは身構えるかのように目を強く瞑り、ロードの言葉を待った
「誕生日プレゼントは何がいいかな？」
思いがけない言葉が目の前から聞こえマリアベルはキョトンとしながら瞬きを繰り返し、目の前に座るロードを見つめた。
ロードはさきほどよりも数倍に頬を真っ赤に染め恥ずかしそうにマリアベルに聞いてきた。
「え…っと…だね。お姉さん達も何かあげるみたいだし、あの…私も何かあげれたら…とね…。あ…あはははは」
そう言いながらロードは頭をポリポリとかいている。そんなロードにマリアベルはつい噴き出してしまった。

「…っぷ。あ…あはははははは！クスクスクスクス…」

「マリア…？」

## 母の涙

不思議そうに見つめてくるロードに気付くとマリアベルは笑いを堪えながらに謝罪の言葉を述べた。
「も、申し訳ありません…ロ…ドさ…プックックック…」
それでも笑いの堪えられないマリアはちゃんと謝罪を言えないままま笑いだしてしまった。
しばらくした後。一度深呼吸をし、呼吸を整えるとマリアベルは突然笑い出してしまった理由をロードに話した。
「申し訳ありません。いつも真面目そうに見えてどこか楽しげなロード様が、あのような事を人に相談もせず考えていたと思うと…」
マリアベルの言葉を聞くなりロードは頬を真っ赤に染め上げ『し、仕方ないでしょう…私だって一人の男なのですから…！』と言った。
「そ、それで！何か欲しい物はないかい？」
ロードは気を取り戻すかのように再び質問してきた。マリアベルは顎に手を当てしばらく考えたのち
「いいえ。お姉様方にも言ったとおり。ただ一緒にお食事をして、一緒にパーティーに参加していただければそれで構いません」
「ですが。私はあなたの兄妹などではなく。隣国の王子なのです。だからこそ貴方にはそれ相応の物を差し上げたいのです…」
そう言われてしまうと、マリアベルも困ってしまいアタフタしているとそれを見かねたロードがしばらく考えた後何か思いついたかのようにマリアベルに話しかけてきた。
「では！私が勝手に考えても構いませんか？」
それを聞くとマリアベルは『それなら…』と安心しきったように『はい！』と返事を返した。
「それなら当日のお楽しみに、ということで。それでは私は部屋に戻りますね。そうと決まっては貴方に差し上げる品を城から持っ

てこさせなければなりませんから。誕生式典は明日、明日の夜には間に合うようにしなくてはいけませんからね 」
――――――持ってこさせる？――――――
「 はい… 」
――――――明日の夜――――――
マリアベルが返事を返すと、ロードは嬉しそうにテンション高々に部屋を後にした。
「 … 」
何もすることがなくなってしまったマリアベルはこれから何をしようか考えていた。すると頭の隅にある人の姿が思い浮かんだ。母だ。現国王王妃であるマリアベルの母親の姿が思い浮かんだ。
マリアベルは思い浮かんだままに王妃の元へ行くことにした。明日の夜にはもう見ることのない母の顔を見に行こうと。
「 姫様どちらへ？ 」
扉を開けながら次女がマリアベルに行き場所を聞いてきた。
「 お母様のところへ 」
マリアベルがそうとだけ告げると優秀な次女は『かしこまりました』と言い。扉を閉めると王妃の部屋へ向かって歩きだしたマリアベルの後ろに付き従って歩いてくる。
部屋の前に到着すると、着いてきていた次女が扉にノックをした。すると中から女性の声が聞こえた。おそらく王妃付きの次女だろう。
「 マリアベル様がいらっしゃられました 」
次女がそう言うと今度は別の女性の声が中から聞こえ『お入りなさい』と答えてくれた。
扉を開け、中に入ると部屋の中央に置いてある華やかで美しいソファでマリアベルとそっくりの少し大人びた女性が紅茶を飲んでいた。マリアベルは女性がお茶を飲み終わるまで扉の前で立っていると。お茶を飲み終え、カップをテーブルに置いた女性がマリアベルト同じ色の瞳を扉の方、マリアベルへと向け優しく微笑んだ。
「 マリアベル。こちらへいらしゃい。一緒にお茶を飲みましょう

」
王妃の微笑みを見るなり、マリアベルは嬉しい気持ちを抑えきれず大きな声で返事を返し、王妃の向かいの席に腰を下ろし次女が入れてくれた紅茶の入ったカップに口をつけた。
マリアベルは紅茶を飲みながら王妃の方を視線だけでチラチラと見ていた。マリアベルが月の女神の娘のということはこの母も月の女神候補であり娘でもあるからだ。
だが、そんなマリアベルの視線に気付いていたのか王妃はカップに視線を向けたままマリアベルに話かけてきた。
「私の顔に何か付いていて？」
そう聞かれると、マリアベルはアタフタとカップをテーブルに置き王妃に謝罪の言葉を告げた。
「も、申し訳ありません！お母様！」
そんなマリアベルの慌てっぷるに王妃はクスリと笑い話しかけてきた。
「そんな緊張しなくていいわ。私と貴方は実の親子なのですから。滅多に会うことがないと言っても実の親子なのにかわりはないのだから」
そう。マリアベルは生まれてすぐ母に抱いてもらうことかなわず姉達の待つ宮殿へと連れて行かれた。そして、そのまま乳母と姉達によって育てられてきたのだ。この１５年間王妃と顔を合わせて話をすることができたのは式典の時運良く会うことができた時だけだ。
そして、王妃は普段後宮の王妃専用の部屋にいる。正しくは、外に出させてもらえないのだ。それは、母が元は旅で世界各国を渡り歩いて歌を歌っていた歌劇団だからこその配慮であり王の寵愛を受けているからこそのはからいだった。
だが、マリアベルは王妃の気持ちを知っているからこそ王が王妃にしている事を許すことができた。王妃は無理やり結婚させられ、無理やり部屋に閉じ込められたとは思っていないだろう。マリアベルの目には二人はちゃんと愛し合っているからだ。そのことに父王が

気付くのはまだまだ先のことだろう。
マリアベルは気になっていることを王妃に聞くことにした。
「あの…お母様？ちょっとお聞きしてもよろしいですか？」
「えぇ。私が答えられることならね」
「…あの。お母様はお婆様、いえお母様のお顔をご存知ないんですよね…？」
「…えぇ。私はまだ産まれたばかりの赤子の時布にくるまれた状態で歌劇団団長様に拾われたから。そうね、いるとしたらその団長様が親のようなものね」
「お母様は、その…髪と瞳の色が他の人と異なることに違和感のような事を覚えた事はなかったのですか…？」
続けてマリアベルが質問すると、王妃は顎に両手を付きテーブルに肘を置きマリアベルを見つめ言った。
「そうね。確かにそう思うこともあったわ。でも、歌劇団で歌を歌うようになってからはこの髪と瞳の色に感謝したの」
「何故ですか？」
マリアベルは本当にわからないかのように王妃に問い返した。
「私の歌劇団時代の呼ばれ名を貴方に教えた事はなかったかしら？」
そう聞かれマリアベルは『はい』と答えた。
「歌劇団時代。私がいた歌劇団はお城に呼ばれるほど大きな劇団ではなかったの。でもある日、私が配役でステージに立って歌いだした途端、周りの空気が変わったわ。お客さん達は私を『月の女神様がここにいらっしゃる』と言ってね。歌ってる私に拝んでる人もいたわ。そして、その言葉が色々な場所で広まり王族や貴族などのお屋敷にお呼ばれするようになったの。だから私はこの瞳と髪の色が好き。この髪と瞳のおかげで育ててくれた劇団にお礼ができたもの。そして、この瞳と髪のおかげで陛下と会えたもの」
その話はマリアベルにも見に覚えがあった。そう、町でマリアベルが噴水のある場所で歌を歌うと町の人達が集まり同じような事をし

ているところを毎回見かける。
「貴方は…嫌い？」
今度は逆に問い返されマリアベルは返事に困ってしまった。
そんなマリアベルを王妃は黙って見つめた後頭に手を当て撫でてあげた。
「良いのですよ。好きでその姿に産まれたわけではないものはたくさんいます。姿だけでなく宿命まで…」
そう言うと、突然マリアベルの額に水のような物が落ちてきた。不思議になり見上げてみると、そこには涙を流した王妃の姿があった。
「お母様！？どうなさったのですか！？」
そう言うとすぐ、王妃はマリアベルを抱きしめ言った。
「ごめんなさい…ごめんなさい…マリアベル…貴方に悲しい思いをさせることになって…」
「おかあ…さま？」
マリアベルに呼ばれると王妃はマリアベルの両肩に手を当て向かい合った。
そして…

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5781t/

砂漠の国の月の姫

2011年10月23日16時04分発行